

『美容院・フレキシブル』シリーズ

【あらすじ】

様々なお客さんが集まるこの美容院は、私たちににとっては不思議であつて、彼らにとってはきつと不思議じゃない。不思議の中に「当たり前前のこと」と「当たり前前じゃないこと」が潜む美容院へようこそ。

サンシヨウウオ

その日は朝から大雨が降っていた。広がる曇天の空にいつもなら少し気分が下がるのだが、今日だけはほっとした。

昨日の天気予報通りの今日の気候は、彼女にとって来やすいものであろう。つまり、やっと予約を延期せずに済んだのだ。

予約時間の丁度十分前、店の戸に着いた鈴を鳴らし、彼女が入ってきた。

「こんにちはー、少し早く着き過ぎちゃったかしら」

「いらっしゃいませ、鳴海さん。全然大丈夫ですよ、それより来られてよかったです」
「ほーんと。この間みたいに快晴で予約延期になったら、いよいよ間に合わないところだわ」

鳴海さんはそう言って笑うと着ていた「水中スーツ」についた雨粒を払った。

「それにしてもすごい雨でしたね……、
「鰭用歩行器」、逆に壊れませんか？」

「大丈夫よ、しっかり防水の仕組みになっているから。万が一何かあっても、海座頭さ

んに連絡したら、車で迎えに来てくれるらしいし」

「それはよかった」

私は戸棚からペットボトルを取り出すと、いつもの様に鳴海さんに渡した。彼女はお礼を言ってお受け取り、水中スーツの吸水口をあけて、ペットボトルの中身を流し込む。

「あら、これいい海水ねえ、どこの？」

「地中海のだそうです。他の「人魚」のお客様に出したときにも評判がよかったので、ストックしてあります」

「そうなのね。確かに私たちはそこら辺の海水を浴びることが少ないし、新鮮でいいわ」

嬉しそうに吸水口を閉めた鳴海さんは、僕のすすめに従って椅子に座った。

「それじゃ、今日は今度の歌の会用に、髪を整えるってことでしたよね」

「そうそう。もう海の中でバサバサ広がって嫌になっちゃうのよ」

早速彼女のうねりのある髪をクリームでとかすと、彼女が鏡の中でぼやいた。

「歌うときに髪が口に入ると嫌なだけで、やっぱり歌いながら髪をなびかせるのって絵になるのよねえ」

「確かに」

「だからあんまりバツサリ切ると困るんだけど、ほどほどに長さ保ちつつ広がりない感じをお願いしたいわ」

「かしこまりました。ストッパーはどうします？」

「“水中ストッパー”ねえ、水の中でもしつかりまつすぐで好きだったんだけど、歌うなら少しうねりがあるくらいの方が映える気がして」

「そうですね、じゃあこのままで」

シャンプー台の方に彼女を誘導すると、タオルを首元に巻き、椅子の傾きに合わせ、横たわらせた。

水道を“海水モード”にし、人魚用のシャンプーとトリートメントを用意したところで、彼女のシャンプーを始める。真水よりべたつきがある海水を彼女の髪に揉み込んでいくと、彼女は気持ちよさそうに息をついた。

「相変わらず上手ねえ」

「ありがとうございます」

「いつも歌の会の時、ここで髪型をやってもらっているけれど、本当に評判いいのよ。」

「いつもお客様に褒めてもらうわ。この間なんか、ヒトデの奥様にうらやましがられて大変だったんだから」

「それはよかった」

自分の技術によって輝くお客様の評判を聞けるのはとても気分がいい。

「私も、鳴海さんの歌の会、行ってみたいんですけどねえ」

「あ、そうそう、それなんだけどねー」

鳴海さんは思い出したように、閉じていた目を開いた。

「今度から、“海中歌会”を陸にもzoom

中継することになったのよ！」

「え、本当ですか？」

「昨今陸の方も私たちの歌を聴きたいって言うてくたさる方が多くてね、運営がやっとなんか重い尾ひれをばたつかせてるの！後でオンラインチケット渡すわね、私からのプレゼント」

「よろしいんですか？」

「もちろん、あなたにはいつもお世話になっているから」

「楽しんで微笑んだ彼女の笑顔と、彼女の歌をやっと耳にできるうれしさに、私も自然と笑みをこぼす。」

「ありがとうございます、ありがたく参加させていただきますね」

「ふふ、よかったわあ」

シャンプーを終え、タオルドライもそこそこにカット台の方に戻ると、濡れた髪をコームでそろえつつはさみを持った。

「それにしても、すごいですね、陸に中継なんて。海中でしか聞けないはずの、海中歌会を聞けるのは、私たちには思ってもみないほど僥倖ですけど」

シャキン、と音を立てて、髪にはさみを入れていく。「……そうねえ」

その時、鳴海さんの顔がわずかに曇った。

「今回のはね……、陸の方達だけの要望って言うよりも、“上陸組”の要望が強いんだよ」

「上陸組って言うと、元海の生物の方達で

すよね？「陸適用手術」を受けた」

「ええ」

鳴海さんは寂しそうに笑ってうなずいた。

人魚や海坊主など、海の者達が陸を目指して移住し始めたのはもう半世紀も前だ。はじめはどうか水中を陸でも再現する様な装置や衣服が作られ、彼らはそれらを用いて陸で生活し始めた。鳴海さんが着ている水中スーツもその一つだ。しかし、常に水を持ち歩き、交換しなければならぬ生活は不便で、彼らは新たな陸生活への方法を開発した。それが陸適用手術である。

陸適用手術は、生物の種類によっても異なるが、その多くが完全に陸の生物の仕組みに身体を変え、水中での生活から切り離すものだった。その技術の発達により、陸と海との関係性は大きく変わったのだ。

今では「上陸組」と呼ばれる彼らは、すっかり陸に溶け込んでいる。海に近いこの地域では、十人に一人は上陸組なんて統計もあるそうだ。

「水中での暮らしに懐かしさを感じて、海

中歌会の陸中継を提案したんですって」

「なるほど」

鳴海さんは皮肉っぽくそう言った。

「海の中を捨てたのは自分たちのくせにね……。ここ十年で、海の人口もずいぶん減ってしまったわ。私の友人も多くが陸に上がった」

「よく聞きます。上陸組も、更に全国へ散らばるようになったと」

「悪いことではないんでしょう。海の中は不便なことが多いし……。それでも、海の中でもきれいなものや素敵なものとはたくさんあるのにね」

鳴海さんは目を閉じると、ため息をついた。

「そういう私もこんなものを着て、わざわざ陸に上がって髪を切りに来てるんだから……。人のこと言えないか」

「難しいですね」

「ほんと」

「たいした意見も言えない私の相づちに、鳴海さんは笑って同意してくれる。彼女は本当に気持ちがいよ海の風を運ぶ女

性だった。

「まあ、だからこそ今回の機会を利用すべきよね」

「というと？」

「オンラインチケットの価格、めっちゃ高価にして、陸の奴らから金を巻き上げてやるのよ！」

鳴海さんは、高らかにそう宣言した。

「そしてその資金を海の発展にまわすの。でっかいショッピングモールやらなんやらガンガン建ててやれば、少しは海の魅力にも気づくでしょ！入り込める水族館のものもいいかもね」

「……なるほど、すごいですね。確かに、鳴海さんがやれば海の中に陸の生物を引き込めそうですね」

「あら、当然よ」

商魂が垣間見える鳴海さんに圧倒されていると、鳴海さんは鏡の中で不敵に笑った。

「人魚は昔からこの歌声で、人間を海に引きずり込んできたんだもの」

サンショウウオ

「こんにちはー」

聞き覚えのある声に振り返ると、店の玄関に、きれいな長髪の女性が立っていた。

「ごめんなさい、予約していませんけれども、大丈夫かしら？」

「お久しぶりですね、宇宙さん。大丈夫ですよ、今日は空いているので」

宇宙さんは、水色の肌になつこりと笑みを浮かべた。

「本日はどうされますか？重力パーマだけか、カットもか……」

「カットもお願いします。あ、でも毛先整

える程度で大丈夫です。今伸ばしてみても「わかりました」

「わかりました」

アンドロメダ銀河センターから取り寄せた、『空気がたっぷり！ご当星水シリーズ』を棚から取り出すと、グラスに注いで宇宙さんの前に置いた。宇宙さんはそれを微笑んで受け取り、肌と同じく青い唇でゆつくりと口に含んだ。

「ありがとうございます、気を遣っていた

だいて。でも、実はもう地球の水も飲めるんですよ」

「そうなんですか、それはよかったです」

彼女は、アンドロメダ銀河の惑星、プルキ星出身の外星人だ。半年ほど前、地球に越してきたそうだ。彼女の前で蒸し返すことではないが、この店に訪れてくれた三ヶ月ほど前、彼女は地球の多くの食べ物が受け付けなくなっていた。いや、受け付けなくなつたのは食べ物だけではなかった。

「重力パーマ、結構保つてますね、よかったです」

「髪は長いから、多少は重く感じますけど、やっぱりパーマかけてから全然違いました」

「それはよかったです」

地球と宇宙との交易が本格的に始まったのは、百年ほど前だ。当時は多少の諍いはあったと言うが、宇宙のあまたの星が所属する宇宙連盟への加盟により、地球は宇宙社会においてある程度の地位を約束された。宇宙不戦条約などの関係もあり、紛争も次第に収束していったという。裏では

地球でしかとれない物質の取引などによる交渉が各星々との間であったとかなかったとか言うが、一般人である私の知るところではない。

そんなこんなで始まった宇宙との交流で、多くの外星人が地球に移住及び観光をしていくこととなった。何でも、地球の植物が出すマイナスイオンやらなんやらは宇宙でも大変珍しいものであるらしく、保養地としての人気が高かったのだ。地球の植物を感じ、地球の食べ物を食べる。『地球浴』なんて言葉が、宇宙流行語大賞に選ばれたこともあったようだから、それなりの人気はあったのだろう。よくある、映画の中のような宇宙人の侵略は実際にはほぼ存在しない形で、地球の宇宙デビューは始まったのだ。ちなみに、宇宙人侵略ものの創作物は、そうなると不謹慎として発禁になりそうなものだが、なぜか外星人たちが大ウケし、今なお不屈の人気を誇っている。

「私の外星人の友人も重力パーマしたいって子が居て、ここのおすすめておきま

した。世界変わるよって」

「ありがとうございます。でも世界変わる、はちよつとハードル高いですね」

「あはは」

地球環境は確かに、宇宙において極めて人気だった。しかし、いくつかの問題点があったことは否めない。その最たるものが、重力である。

宇宙の数々の星と地球の重力はもちろん異なる。悪かったのは、地球の重力が、その中で平均より極めて重かったことである。外星人は、地球での身体の重さに極めて戸惑うこととなった。当然、宇宙で確固たる地位を築きたい地球がそれを無視するはずはなく、葉や機械を使った、重力調整手段が多く開発された。その中の一つが髪にかける重力パーマである。

髪に重力がかかるというのは、想像しにくいかもしれないが、頭がわずかでも重いとすることは意外とストレスである。もちろん、重力調整薬などの併用が基本だが、重力パーマは外星人に対して結構な需要があり、今はどこの美容院でも提供される

サービスとなっている。

「宇野さん、なんだかお元気になられましたね。よかったです」

「その節は大変ご迷惑をおかけしました」

プルキ星重力対応のパーマ剤を混ぜながら話すと、宇野さんは恥ずかしそうにそう言った。

「いえいえ、迷惑だなんてそんな」

「私、あるときほんとに思い描いてた地球生活とのギャップに落ち込んで……も自分の身体も心も重くて嫌になっちゃってたんです」

「外星人の方は、やっぱりそういう方多いですよ」

地球においても、日照時間が長い場所から短い場所へ移住した人は、気持ちが悪くなりやすいという。外星人達にとっても、重力は自分たちが思っているよりも気持ちに影響しやすい要素だった。

特に三ヶ月前の宇野さんはそれが顕著で、自身の体の重みが心にまでのしかかり、地球の全てを拒絶するような身体の反応をしていた。

『地球に来るなんて、やめておけばよかったのかな』

きれいな髪をギリギリまで短くし、うつむいてそう呟いていたのを今でも覚えてる。

「何か、きつかけがあったんですか？」

「えへへ、そうですよねえ……」

青緑色の髪にコームを通しながら訪ねると、宇野さんはちよつと考えたそぶりをして話し出した。

「会社で、地に足が着いたねって言われたんです」

「ほう？」

「今の上司は、ブルキ星からお世話になっている方なんですけど、ブルキではいつつもフワフワしすぎだつて、注意されてて……」

「あらら」

「でも、地球に来てから、浮くときは浮く、立つときは立つができるようになったつて。それは地に足が着いてる証拠だねつて言ってもらえたんです。それからかなあ、地球の重力も悪くないつて思えたの」

「それは嬉しいですねえ」

「ええ、まあ……」

納得してうなずいた私は、彼女の少し歯切れの悪い返事に首を傾げた。ふと鏡の中の彼女を見ると、水色の頬にほんの少しピンクに色づいているように見えた。

「あと、理由は……まあ、他にも諸々な感じですかね」

あのときの様に顔をうつむけると、彼女はやっぱり少し照れたように笑った。

「でも、よかった。ここに来たら、また私、

浮かんじやうかもつて思つてたんです」

「どういうことですか？」

宇宙連盟クレジットカードで会計を済ませた彼女は、コートを私から受け取ると、そう言った。

「私、今お付き合ひしている人が居るんです」

「それは素敵ですね、おめでどうございませす」

「ありがとうございます」

微笑む彼女は嬉しそうだが、前の言葉からいまいち話がつながっていないように思った。

「恋つて不思議ですね、地に足が着いているのに、浮かんでるよつうな心地がする。心地よよつうで、ちよつと気持ち悪い感じですね」

「宇野さんは詩人ですね、素敵な言葉をお持ちだ」

「あはは。それでですね、私、一番に地球で浮いているなつて、思つたことがあるんです」

「ほう？」

話の筋が見えるよつうな見えなよつうな心地で首を傾げると、彼女は悪戯つぽく、宇宙で揺蕩う銀河のよつうに輝いた笑みを広げた。

「ここで、あなたに会つたときです」

明るい恒星の日差しが降り注ぐ中、自信にあふれた足取りで歩いて行く彼女を見て、私は少し詰めていた息を吐き出した。

彼女は、他者を浮かせることもできる宇宙人らしい。